

kriyā, 行為, 出来事

—Patañjali と Bhartrhari—

谷 沢 淳 三

サンスクリット語の 'kriyā' という語は「行為」と訳されることが多いが、場合によっては「運動」などとも訳される。そして kriyā は出来事 (event) の一種である。行為と出来事は当然全く同じものではない。行為は出来事に含まれるが、全ての出来事が行為に含まれると言うことはできない。たとえば、「ゴンゾーが石を投げる」はゴンゾーを行為者とする行為であろうが「石が飛んで行く」は行為を意味しているのであろうか。これは、石の運動、あるいは石が飛んでいくことという出来事を表していると言うべきである。あるいは、人を指している語が主語ならば行為が記述されていると言うこともできない¹。「彼は会社を首になった」は彼の行為ではない。そこで、以下の議論では、行為に含まれない出来事のことを「単なる出来事」(mere happening) と呼ぶことにしよう。

上のような区別の問題がなぜ重要かと言うと、行為とは何かという問題が、自由意志や決定論の問題、あるいは行為者の責任という問題と大きく関わるからである。そこで、我々は日本語として、「行為」と区別されるべき「出来事」「単なる出来事」というような言葉を上に挙げた。またそこで括弧の中で示したように、英語で述べられる行為論では、特に action と event あるいは (mere) happening が区別される。ところが、サンスクリット文献における kriyā 論における 'kriyā' は、「(単なる) 出来事」「運動」を含んだ意味で使われており、それにもかかわらず、上で見たように、日本語訳は「行為」という統一された訳が使われることがしばしばである。これは不適切なのではないだろうか。そして、kriyā 論を説くインドの哲学者にとっては、「単なる出来事」「作用」「運動」から区別されるべき行為という概念というものにこだわりがなかったのであるか。あるいは、彼らの kriyā に関する議論は、今までの一般的な呼び方のように「行為論」と呼ぶべきものではないのだろうか。このような問題を、本論文ではパーニニ文法学派の Patañjali と Bhartrhari の述べていることを中心として見ていくことにする。

1. kāraka 論

インドの文法学では、文章を分析するのに、kāraka (行為を引き起こす要素) という概念を用いてなされることが多い²。この論では、文章の基本にまず動詞が置かれる。そして動詞語根 (dhātu) の意味するもの、すなわち kriyā に対して、文章中の他の言語単位が意味するものがどのような役目を担っているかということがこの kāraka によって示される。わかりやすさのために日本語で簡単な例を挙げて説明してみよう。

ゴン太はウェイトレスに注文する

この場合、動詞「注文する」は注文するという kriyā 意味する³。この kriyā との関係で他

の表現を見てみると、「ゴン太」はその *kriyā* を成す主体 *karṭṛ* (今までの研究では「行為者」あるいは「行為主体」と訳されるのが普通である) を意味し、「ウェイトレス」はその *kriyā* の〈対象〉(日本語の文法の用語では「目的語」の意味するものと言うことで〈目的〉となるだろうが、他の *kāraka* との関係で〈対象〉の方が適切と思われる) (*karman*)⁴ を意味する。そして、「ゴン太」と「ウェイトレス」がそれぞれ *karṭṛ* と〈対象〉 (*karman*) を意味することは、「は」と「に」という助詞によって表されている。日本語におけるこの助詞の役割をサンスクリット語では格語尾が担うことになる。(しかし、たとえば「..は」を示すのは第一格語尾 (*prathamā*) であるからと言って、それが必ず *karṭṛ* を示すわけではない。) 当然我々はさらに複雑な文章を作ることができる。

ゴン太はレストランで恋人のために座席からメニューでウェイトレスに注文する。この場合は、「注文する」の意味する *kriyā* に対して、さらにその *kriyā* が起こる〈拠り所〉 (*adhikaraṇa*)⁵ を意味する「レストラン」、その *kriyā* を通じての〈目的〉 (*sampradāna*)⁶ を意味する「恋人」、その *kriyā* を引き起こす〈起点〉 (*apādāna*)⁷ を意味する「座席」、その *kriyā* の直接的な〈手段〉 (*karāṇa*)⁸ を意味する「メニュー」という語がさらに加わっている。これら上述の *karṭṛ* に始まり〈手段〉 (*karāṇa*) に至る六種類は、*kriyā* に対してどのような関係、役割にあるかが表されており、総称して *kāraka* と言われるのである。

この *kāraka* 理論では、見てきたように、動詞 (より正確には動詞語根) の意味するものが *kriyā* である。そうすると、たとえば、ウェイトレスが、何らかの理由で客に嫌がらせをしようと意図して

ウェイトレスがメニューをテーブルから落とした……(1)

という場合の「落とした」が意味するのは *kriyā* であり、さらに、

テーブルの上からメニューが落ちた……(2)

の「落ちた」の意味も *kriyā* である。それゆえに、もし *kriyā* が行為であるとする、両者とも行為であるということになる。しかしながら、一般的には、(1)の「落とした」の表しているものは行為であり、(2)での「落ちた」は行為として記述されていない。(1)が真ならば、(2)も真である。しかし、(2)が真であっても、必ずしも(1)は真ではない⁹。メニューは強い地震によって落ちたのかも知れない。そうすると(2)が単なる出来事である場合と、(1)で述べられている行為に伴っている場合、つまり行為の結果である場合の違いは何か。それは、(2)を引き起こす仕方の違いであると考えられる。そこで、その〈引き起こす仕方〉という点に着目して、行為の特徴が求められることになる¹⁰。(1)の「落とした」は、明らかに、ウェイトレスが何らかの目的で、あるいは何らかの意図で行ったことを述べている。上で述べたように、ウェイトレスが、「この客に嫌がらせをしたい」という欲求を持つ。そして、テーブルの上のメニューを落とせば、客は嫌な思いをすと思う。言い換えるとそのような信念を持つ。そのように彼女の欲求と信念が(1)を引き起こした原因である、というように Davidson にならった因果的な説明がなされるかも知れない¹¹。このようにして、出来事には行為もそうでないものも含まれるが、大雑把に言うと、何らかの心的状態が働いて、それがあつて出来事を引き起こした場合には、行為と考えられ、なんらそのような心的な状態に関わらないものは単なる出来事であると言うことが可能である¹²。

MBhでは、「諸々の kāraka の特定の活動が kriyā である」と述べられている¹³。すなわち上述の kāraka 論と密接に関係して、動詞語根の意味するものが 'kriyā' と総称されるのである。そのようにして文法学では、「置いた」も「落ちた」も動詞というひとつの範疇でくくられるので、その範囲内では、両者に区別がないことになる。それを端的に表している例として、Bhartrhari の VP の KS の最初の詩節を見てみよう。

確定したもの (siddha) でも確定していないもの (asiddha) でも、達成されるべきもの (sādhya) として表示されると、順序というあり方に依存しているものであるので、kriyā と表示される。(KS1)

「確定したもの」とは、たとえば、すでに終了して過去のものとなっているものを言う。現在 (2003年10月30日) においては、小泉首相が北朝鮮を「訪問した」というようなものである。一方「確定していないもの」とは、現在進行中、あるいは未来のものを言う。そしてこの詩節では見ての通り、何も欲求、意図などの心的状態が触れられていない。つまり、「達成されるべき」に「人によって」というニュアンスが込められていないことになる。(常識的な感覚では「達成されるべき」と言うと「人によって」という意味合いが込められているかもしれないが。) kriyā と呼ばれるためのポイントは、「達成されるべきもの」ということであり、それはすなわち「順序というあり方に依存している」ということに通じている。すると、たとえば窓が開いていて風が入ってきて、机の上の紙が落ちたという出来事も kriyā と呼ばれる条件を備えていることになる。実際、上の詩節の直後に Bhartrhari は、kriyā とそうでないものの例として次のようなものを挙げている。

因果関係にあることによって、'dhvanati' ((音が) 鳴る) という場合、音が順序に依存している。一方、順序が考慮されない場合には、'dhvani' (音) とだけ述べられる。(KS2)

一般に音が鳴ることはそれだけでは行為とは考えられない。棚からコップが落ちてガチャンと音が鳴るのは行為ではない。しかし、誰かがコップを意図的に叩いて音を鳴らすのは行為である。このように、'kriyā' という場合、行為も、それ以外の単なる出来事も含まれることになる。それでは文法学者であるパーニニ文法学派の連中もそのレベルで終わり、彼らの kriyā 論は行為論としては、哲学的に何の興味も引き起こさないものなのであろうか。そこでこの問題を考える手がかりとして、kriyā を引き起こす主体、すなわち karṭṛ に対する考え方を見ることがふさわしいと思われる。

2. karṭṛとは〈自らに依存するもの〉 (svatantra) である

karṭṛは今までの研究では「行為者」(あるいは「行為主体」と訳されるのが普通であるが、その点をここで考えてみよう。行為と単なる出来事の区別というのは、上にも述べたように行為者がそれを行うことを意図したか否かと言うような心的状態という点から説明され

る場合が良くある。上の(1)では、行為者であるウェートレスがメニューを落とそうと意図してそうしたので「落とした」は行為であり、(2)はある行為の結果かも知れないし、あるいは行為と関わらない単なる出来事であるかも知れない。しかるに kāraka 論に従えば、(1)の「ウェートレス」も(2)の「メニュー」も karṭṛ を意味するとみなされる。Pāṇini のストラでは、上に述べた kāraka のそれぞれの説明が含まれている。その中で、karṭṛ には、他の諸 kāraka に比べて中心的な立場が与えられている。それはどのようなものであろうか。karṭṛ の説明で、最もよく参照されるものを見て考えていくことにしよう。それは次のようなものである。

karṭṛ とは〈自らに依存するもの〉である (svatantraḥ kartā P.1.4.54)

ここでの〈自らに依存する(もの)〉(svatantra) とはどのような意味なのだろうか。まず MBh のこの言葉に関する説明の箇所を見てみよう。

自らの tantra を有するものが svatantra である。

このことから何だと言うのか？

織工にまで当てはまってしまうことになる。

このような欠陥はない。この ‘tantra’ という語は、ある場合には縦糸を意味する。例えば次のように。「縦糸が広げられた」「縦糸が編まれた」。[それらの場合] 縦糸 (vitāna) と理解される。[しかるに] ある場合は〈主〉(pradhāna) を意味する。例えば次のように。「このバラモンは svatantra である」と述べられると、「自らを主としている」と理解される。それゆえに、〈主〉を意味する ‘tantra’ という語がここで採用されている。(MBh on P.1.4.54 (MBh I, 338, 17-20))

このようにして、「自らに依存する」(svatantra) とは「自らを主とする」(svapradhāna) であるとされる。これはさらにどういうことを意味しているのかを探求するために、Bharṭṛhari の言っていることを見てみよう。

① [〈手段〉(karaṇa) などの kāraka の働きよりも] 前に、[〈手段〉(karaṇa) などの kāraka とは] 他[・]の[・]こ[・]と[・]に[・]基[・]づ[・]い[・]て[・]〈能力〉(śakti) を獲得するがゆえに、② [他の kāraka の] 従属性を引き起こすがゆえに、③ [他の kāraka は] その [karṭṛ に] 基づいて機能を有するがゆえに、④すでに [効果を発揮した他の kāraka の働いている] 機能を停止させるがゆえに、⑤ [他の kāraka においては、ある kriyā を引き起こすのに代わりが使われることが可能であっても、karṭṛ の場合には] 代わりが見られないがゆえに、⑥ [他の kāraka がなくて] 自らだけであって [も]、見られるがゆえに、たとえ [他の kāraka が介在することによって kriyā が成立し、karṭṛ 自体] 離れたところから [その kriyā の成立を] 助けるものであっても、karṭṛ には〈自らに依存すること〉があると述べられる。(SS 101-102)

まず①について言えば、重要なのはそこで述べられている「他のこと」である。karṭṛがkarṭṛたるゆえんは、(1)の例で言えば、メニューなどを使うよりも前に、その〈手段〉(karaṇa)としてのメニューなどとは他のことに基づいて行為をする能力、行為者たる能力を持っているということである。その「他のこと」とは何か。注釈者のHelārājaは「何かを目的として意図すること(arthitā)など」と解釈している。そうするとこの場合、何らかの意図に基づいて、karṭṛとしての立場を得るということになる。すなわち、ここでは、行為を引き起こす心的状態として前にふれたものが他のこととして挙げられている。そうすると、この他のことこそが、前述の、行為を単なる出来事から区別する〈引き起こす仕方〉に相当する重要なものと考えられる。この〈引き起こす仕方〉によって、行為の因果的説明が与えられるのである。そして、その場合メニューは〈対象〉(karman)というkāraṇaであり、テーブルは〈起点〉(apādāna)というkāraṇaであるが、それらは、この落とすという行為においてkarṭṛの働きに従属する(②)ことにより機能を働かせる(③)。④についてはどうか。ウェイトレスはテーブルからメニューを落とすことによって、客に嫌がらせをするという目的がある。ここで我々は、ウェイトレスがテーブルからメニューを落とすという行為はウェイトレスが客に嫌がらせをするという行為とどう関係するのか、あるいは、そのふたつは等しいのかという問題を持つことになるが、ここでは議論をわかりやすくするためにその重要な点は6に持ち越すこととする。とにかくここで言っていることに合わせて(1)を解釈すると、メニューを落として客に嫌がらせをするということでひとまずウェイトレスをkarṭṛとするkriyāが遂行されれば、ウェイトレスによって「もうこのメニューは必要ない」というように、メニューからkāraṇaとしての役目をやめさせることができる¹⁴。これが④である。(さらには、(1)ではメニューは〈落とす〉に対する〈対象〉(karman)であったが、〈嫌がらせをする〉に対しては〈手段〉(karaṇa)になると思われる。実際は、ここでもっと単純な場合が考えられているように思える。たとえば「彼はバットで両親を殴った」においては、殴ったという行為が達成されるとバットに殴る〈手段〉(karaṇa)であることを彼はやめさせるということである。)⑤は、ウェイトレスは嫌がらせをするのにメニューを使ったが、このことはたとえば(少し面倒でも)口でその客に何かぞんざいな言葉を投げつけることによって可能であったし、あるいはテーブル上のコップをわざと倒すことも可能であったが、karṭṛにはそのような代わりとなるものはないということである。⑥は、たとえば「彼は存在する」というような場合、karṭṛ(彼)以外のものがそこには見られなくても、とにかくkarṭṛは示されているということである。一方〈手段〉(karaṇa)などのkāraṇaはkarṭṛなしでは見られることがない。

以上のように説明されている〈自らに依存する(もの)〉というkarṭṛの定義により、我々は行為と単なる出来事の違いを明らかにすることができるであろうか。それを説く前に、上記の「他のこと」に関するある解釈について簡単に触れておくことにしよう。

3. 他のこととしての pravṛtti

小川英世は、上の①の「他のこと」をpravṛtti(働き, 作用, 活動)とするという解釈を提示し¹⁵、それをさらにapūrva(文字通りの意味は「以前にないこと」という概念と結び

つけて、詳細に論じている。そこでのポイントは、pravṛttiが、個々のそれではなく、普遍 (jāti) として考えられているということである。たとえば「瓶を作る」においての瓶は、作るという kriyā に対してその〈対象〉 (karman) であるが、この作るという kriyā が完成しない限りは存在していないので作るという kriyā を引き起こす kāraṅka としての役割を演じることができないということになってしまう。そこでこの場合、個としての瓶を作る kriyā を促進する (prayojika) のは、普遍としての瓶であるとみなされる。それと同様に、個々の kriyā を促進するのは普遍としての kriyā、すなわち pravṛtti であると考えられる。

ここで問題なのは、「促進する」(prayojika) である。小川によれば、pravṛtti は自らの個としての基体を有しない場合は、自らが現れ出るためにその基体を探し求める¹⁶。この見解に文字通り従えば、pravṛtti 自体に意図、欲求があるかのようなのである。また、SS 33に基づいて、普遍的な活動 (activity)、すなわち pravṛtti は、ありのままの実体 (bare substance) から行為者としての機能を果たす能力を引き出す (draw out) と述べている¹⁷。この〈引き出す〉も意図を持って pravṛtti が行う行為であると取られるかも知れない。

しかしながら、上の瓶のケースにおける普遍 (jāti) の場合、決して、普遍自体が「探し求める」わけではない。あくまでも普遍としての瓶を念頭に置いて個としての瓶を作り出すのは、瓶を作る人である。小川も、「人が瓶を作る時、最初にその普遍に基づいてそれを心に浮かべ、それからそれを作り出すことのできる諸々の原因に向かって行為をなす」と述べている¹⁸。それと同様に、あくまでも行為者が、普遍的な行為を念頭において、個々の行為へと向かうのである。これが上の「促進する」の意味であり、普遍としての行為が直接的に個々の行為を引き起こすわけではない。小川も、最初に自ら示した問題提起を受けて、結論部において、pravṛtti としての apūrvā は、決して宇宙的な (cosmic) 原理や力ではなく、一種の「実践されるべき ideal な活動である」と述べている¹⁹。

そこで、上の①に戻ってみよう。以上のように考えると、「他のこと」を pravṛtti とする解釈は、決して最初に挙げた Helārāja の「何かを目的として意図すること」という解釈と矛盾するわけではない。それは、結局、全ての行為は普遍としては常に存在しており、人はそれを思い浮かべて (その普遍を思い浮かべること自体は個々の出来事である)、具体的な個としての行為へと具現するということである。たとえば、上述の Davidson 的因果論を当てはめると次のようになる。あるウェイトレスが、「客に嫌がらせをしたい」という欲求を持つ。そして彼女は「メニューをテーブルから落とせば、客に嫌がらせができる」という信念を持つ。まさにこれらの欲求、信念の構成要素である「客に嫌がらせをする」「メニューをテーブルから落とす」というのは、普遍的な行為、すなわち pravṛtti に他ならない。そこでそれらに基づいて、ウェイトレスはその行動へと向かう。実際に、小川が注に示しているように、Helārāja は、上の瓶を作るという場合の説明で、「それを目的として意図する者たち」(tadarthinaḥ) という表現を使っており²⁰、それは、①の「他のこと」の Helārāja の解釈「何かを目的として意図すること (arthitā)」と合致している。

4. 何が kartr なのは、話し手の意図に依存する

上で、kāraṅka 論に従えば、(1)の「ウェイトレス」も (落とすという kriyā に対して)

(2)の「メニュー」も（落ちたという kriyā に対して）karṭṛを表していると言った。この点について、Bhartrhari は次のように述べている。

剣などが karṭṛであると考えられる時には、鋭さなどが〈手段〉（karaṇa）であると知られる。鋭さなどが〈自らに依存する〉と考えられ [「鋭さが切る」と表現され] る時には、[karṭṛ性と〈手段〉（karaṇa）性という] 二重の能力が定まっている。

[話し手の意図によって] 自らの相違があっても、一つの対象はそのように [一つとして] ある。それゆえに、[そのような二重の能力] の基体であるので、[能力という点で] 相違があっても、[「剣が切る」というような場合の剣における] karṭṛ性は〈手段〉（karaṇa）性を無効にする。(SS 96-97)

「彼が剣によって切る」では、剣は〈手段〉（karaṇa）を表しているが、「剣が切る」という場合は karṭṛであるとみなされている。さらに、「剣は鋭さによって切る」と表現されれば、新たに鋭さが〈手段〉（karaṇa）として表されている。このように、実際は karṭṛとしての剣と〈手段〉（karaṇa）としての剣、あるいは karṭṛとしての鋭さと〈手段〉（karaṇa）としての鋭さという二つのものがあるわけではなく、一つのものであるが、話し手の意図によって異なった能力と結び付けられて異なった kāraka を表すものとして述べられるのである。

この剣の例を、上の(1)(2)の例に合わせて述べると次のようになる。

彼は剣によって切る……(3)

剣が鋭さによって切る……(4)

鋭さが (……によって) 切る……(5)

この場合、「行為」と述べることができるのは(3)である。それゆえに、行為者と述べることもできるのは(3)の「彼」だけである。(4)と(5)は(3)で述べられている行為の結果 (result) としての出来事が述べられていると言うことができる。それらの場合は、karṭṛは行為者ではない。ところが、kāraka 論に従えば、何を karṭṛとみなすかは話し手の意図によるものであり、世界の存在の側にあるものに基づいているわけではない。つまり、記述の仕方によるということになる。Bhartrhari は上述の〈自らに依存する (もの)〉の説明の直後に次のように述べる。

上述の諸々の属性によって、制限 (niyama) は語に対してあるのであり、実在物 (vastu) に対してあるのではない。karṭṛの [それらの] 属性を述べようとする意図がある時に、語に基づいて karṭṛは理解される。(SS 102)

さらに上の剣の例は、基本的に彼を karṭṛとした行為があつて、それに基づいた(4)や(5)の例が考えられるということができるが、kāraka 論では、基本的にこの例における彼のような行為者を karṭṛとはしていない場合にも話し手の意図によって karṭṛは想定される。たとえば「芽が生じる」という場合である (SS 105)。

以上の議論から、kāraka 論では動詞語根の意味するものはすべて kriyā であり、よって

そこでは行為と単なる出来事の区別はなされていないということになるのだろうか。

5. 行為者とは主たる kartṛである

上の4で「芽が生じる」のような場合の芽も kartṛとみなされるということを見た。それは、動詞語根の意味一般を kriyā とする文法上の説明からの帰結である。しかし、彼らパーニニ文法学派の連中は、そのような単なる出来事と区別して、行為の分析を行っている。それを以下に見ていこう。

まず、2で述べた kartṛの特徴を表している〈自らに依存する(もの)〉とはどういうことだったかを思い出してみよう。六つの特徴が挙げられていたが、ここで問題とするのはその第一番目である。それは、

①他の kāraka よりも前に、他のことに基づいて〈能力〉を獲得する
 ということであった。そして、この中の「他のこと」とは、意図、欲求などの心的状態と考えることができた。そうすると、ここにおいて行為と単なる出来事を区別する心的状態、すなわち意図、欲求というものが触れられている²¹。1で、行為と単なる出来事の違いは、それを〈引き起こす仕方〉の違いにあると述べた。そうすると、行為者性としての kartṛ性 (kartṛtva) を、他の kartṛ性から区別するものこそ、その仕方であると言うことができる。明らかに、文法学派によっても、行為においては、人の持つ意図などの心的なものが〈引き起こす仕方〉に重要な役割が与えられているとすることにより、行為の特徴をある特定の因果的な作用に求めていたのである²²。では、「メニューが落ちる」「剣が切る」というような行為の結果の例はどうなるのだろうか。言うまでもなく、メニューや剣には心はない。そうすると、これらの例では行為と行為の結果を結びつけることにより、行為者の姿がメニューや剣に重ね合わされているとすることができる²³。そのように重ね合わせようとするところこそが、メニュー、剣を kartṛとして述べようとする話し手の意図に他ならない。すなわち、決して文法学派は行為と出来事を区別していないわけではない。文法上、「人が剣によって切る」も「剣が鋭さによって切る」も、形式に区別がないがゆえに、同一レベルの説明を与えるために、剣にも kartṛとしての〈自らに依存する(もの)〉が重ね合わされていると考えることができる。

この点を、さらに確かなものとするために、kāraka 論の中で出てくる「主たる kartṛ」「主たる kriyā」という考え方を見ることにしよう。まず話は、'kāraka' という語の語源分析から始まる。この語は kṛ (行為する, する, 作る) という語根に ṇvul という kṛt 接辞が付いていると分析される。まず, P.3.1.133 'ṇvulṛcau' により, kṛの後に ṇvul という kṛt 接辞が導入される。kṛt 接辞というのは、特に他の kāraka を意味する規定がなければ²⁴ P.3.4.67 'kartari kṛt' により kartṛを意味すると規定されている。そして, P.7.1.1 'yuvor anākau' により, ṇvul は aka という形になり, P.7.2.115 'aco ṇṇiti' により kṛの ṛは vṛddhi 化し, kāraka という形となる。こう分析すると、まさに kāraka は kartṛを意味することになり、他の kāraka には適用されないことになってしまう。その点から、MBh において次のような議論がなされる。

[Vārttika 6] もし語源上の意味に従うならば, karṭrでないものに対して karṭrを意味する語が適用不可能になる。

語源上の意味に従うと, karṭrでないものに対して karṭr [を意味する 'kāraka'] という語は適用不可能である。つまり, 「<手段> (karana) は kāraka である」とか, 「<拠り所> (adhikarana) は kāraka である」とかが [不可能になってしまう]。

[Vārttika 7] 確定している。kāraka 毎に調理する (pac) などの kriyā は異なるので, <手段> (karana) と<拠り所> (adhikarana) が karṭrとなる。

<手段> (karana) と<拠り所> (adhikarana) が karṭrとなるということは確定している。

どのようにか。

kāraka 毎に調理するなどの kriyā の区別があるがゆえに。すなわち, kāraka 毎に調理するなどの kriyā は異なっている……

この, kāraka 毎の調理するなどの kriyā の区別とは何か。

[Vārttika 8] 鍋を火に置くこと, 水を注ぐこと, 米を入れること, 薪をくべることという kriyā が, 主たる karṭrの調理である。

鍋を火に置くこと, 水を注ぐこと, 米を入れること, 薪をくべることなどの kriyā をなして初めて「デーヴァダッタは調理する」と述べられる。その場合「調理する」(pac) はそれ [らの kriyā を] 意味する。これは, <主>たる karṭrの [行う] 調理である。このように<主>たる karṭrの karṭr性がある。

[Vārttika 9] 「1 ドローナを調理する」「1 アーダカを調理する」というように, 取り入れる kriyā, そして保持する kriyā が<拠り所> (adhikarana) の調理である。

「1 ドローナを調理する」「1 アーダカを調理する」というように, 取り入れる kriyā, そして保持する kriyā をなす時に「鍋が調理する」と述べられる。その場合, 「調理する」(pac) はその [ようなkriyā] を意味する。これは<拠り所> (adhikarana) の [行う] 調理である。このように<拠り所>の karṭr性がある。

[Vārttika 10] 「諸々の薪が調理するだろう, すなわち [米が] 柔らかくなるまで燃やすだろう」というような燃やす kriyā が<手段>(karana) の調理である。

「諸々の薪が調理するだろう, すなわち [米が] 柔らかくなるまで燃やすだろう」というような燃やす kriyā をなしつつ, 「諸々の薪は調理をする」と述べられる。その場合, 「調理する」(pac) はその [ようなkriyā] を意味する。これは<手段> (karana) の [行う] 調理である。このように<手段>の karṭr性がある。(MBh on P.1.4.3 (MBh I, 324, 10-325, 3))

Bhartṛhari は, この議論を次のようにまとめている。

引き起こすこと (niṣpatti) のみに対する karṭr性というのは, 残らず全ての kāraka においてある。役割機能 (vyāpāra) の相違に依拠する場合に, <手段> (karana) であることなどが可能になる。(SS 18)

従属する kriyā (guṇakriyā) の諸 karṭrは, [<主>たる] karṭrによって従属

させられている〈能力〉を有している。〔それらは〕従属させられていても、十全な自らの役割機能によって内属されており、kriyāの区別に従って〈手段〉などとして知られ、〈自らに依存すること〉を獲得して、〔〈主〉たる karṭṛが行為を開始した〕後に〔も〕、〈主〉たる〔kriyā〕に対して、karṭṛであることに達する。(SS 20-21)

行為も単なる出来事も、それを引き起こすものがある。違いはその〈引き起こす仕方〉にあると述べた。それゆえに、ここで、全ての kāraka に karṭṛ性があるというのは、その〈引き起こす仕方〉の違いに触れずに、たんに引き起こすという面だけを捉えて言う事ができるのである²⁵。たとえば〈手段〉は〈主〉たる kriyā に対しては本来は〈自らに依存すること〉を有していない。しかしながら、それは〈手段〉としての役割機能 (vyāpāra) に対しては〈自らに依存すること〉を有しており、それゆえにそれに対しては karṭṛである。MBh では、ここでの〈調理する〉の場合、普遍的な (sāmānyabhūta) 〈調理する〉という kriyā があると考えられている²⁶。それぞれの kāraka は、その普遍としての〈調理する〉の個々の例としての〈調理する〉を引き起こすことによって、普遍的な〈調理する〉の成立に一役買うことになる。つまり、普遍としての〈調理する〉は個々の〈調理する〉があって初めて成立するのである。そして、〈主〉たる karṭṛが薪に火をつけた後も、すなわちその karṭṛの手が離れた後も、薪は自動的に燃え続けて、その意味で普遍的な〈調理する〉に対しても、〈自らに依存すること〉を有していることになる。そのように普遍的な〈調理する〉に一役買うことにより、〈主〉たる kriyā、すなわち pac という語根によって表示されるものを引き起こすのに参与している。つまり、〈主〉たる karṭṛの手を離れた後も普遍的な〈調理する〉に貢献することを通じて〈主〉たる kriyā に参与するということから、その意味で、〈主〉たる kriyā に対しても、〈手段〉 (karaṇa) は karṭṛであるということが可能になり、‘edhāḥ pacanti’ (諸々の薪が調理する) と表現されることができるようになる。このようにして、〈手段〉 (karaṇa) などにも karṭṛ性が認められ、kāraka と呼ばれることが正当化される²⁷。〈調理する〉 (pac) の場合の〈主〉たる kriyā とは、語根 pac により表示される〈調理する〉ということであり、それは、鍋を火に置くこと、水を注ぐこと、米を入れること、薪をくべることなどからなる複合行為である²⁸。薪や鍋などの諸 kāraka は、火を燃やして米を柔らかくするとか、一定量の米や水を保持するとかの従属した kriyā、すなわち guṇakriyā をなすことによって、その〈主〉たる kriyā を引き起こすのに貢献するので、karṭṛというものを、引き起こすこと一般の観点から考えると、それらも karṭṛと見なすことができるのである。

以上のように、〈手段〉 (karaṇa) や〈拠り所〉 (adhikaraṇa) などが kāraka と呼ばれることが正当化されたわけだが、ここで見てきたように、結局第一に、上の例ではデーヴァダッタが〈主〉たる karṭṛとみなされている。〈主〉たる karṭṛは、〈手段〉 (karaṇa) などとは異なって、何か自分の役割機能を介在して〈主〉たる kriyā に対する karṭṛ性を有するのではなく、直接にその karṭṛ性を有している。すなわち、〈調理する〉の行為者は〈主〉たる karṭṛと考えられ、その karṭṛによる kriyā が〈主〉たる kriyā、すなわち行為とみなされる。これは4の剣の例で述べた「基本的に彼を karṭṛとした行為」に相当するも

のである。

この〈主〉たる karṭṛ という考えからわかることは、文法学派でも、まず第一義的に karṭṛ というものを、何らかの心的状態を有するものと考えていることがわかる。そして、文法上、たとえば「彼は切る」における「彼」も、「剣が切る」における「剣」も文法上の形式からは差がなく、kāraḥ 論としても両者の意味するものとも karṭṛ であると説明される。しかし、あくまでも後者のような場合は、行為の結果としての出来事が記述されているのである。そこでの karṭṛ は決して行為者ではない。たとえ、行為者（彼らのいうところの「〈主〉たる karṭṛ」）の姿がそこに重ね合わされているとしても。つまり、実際には行為者であるには〈自らに依存すること〉が必要なのだが、その持つ六つの特徴の中で①を有していないもの（たとえば剣）でも、有しているかのごとくに話し手によって用いられるということである。

6. kriyā の分析 主と従

上で述べた〈調理する〉という kriyā における様々な kāraḥ に karṭṛ たることが考えられるという議論は、次の問題を思い起こさせる。様々な過程により行為が成立すると考えた場合²⁹、「行為」とは過程のどの部分を言うのか。全体を言うのか。あるいは、部分それぞれを異なった行為と考えるのか。あるいはそれら以外の見方をすべきなのか。〈調理する〉(pac) の例で考えてみよう。

まず、第一に、ゴン太が粥を調理する場合、その行為は上の 3 で述べたように、個としての出来事、行為と捉えることができる。そうすると、同一の個体に対して様々な記述を当てはめることができるように、同一の個としての行為を様々な記述で表すことができるということになる³⁰。5 では諸 kāraḥ の kriyā というものが明記されているが、ここでは説明のために少しそれに手を加えて述べてみよう。

ゴン太が米から粥をつくる……(6)

ゴン太が薪に火をつけ、そこに鍋を置き、水を注ぎ、米を一升入れる……(7)

薪が米を柔らかくする……(8)

一升の米が柔らかくなる……(9)

粥ができる……(10)

ここでは、たまたま五つの記述が述べられている。何を説くにしても、パーニニ文法学派の基本的立場は世界の様々な事柄が実際にどのようなものであるかというよりも、それらをどのように記述するかという観点に立っている³¹。4 で述べた、何が karṭṛ かは話し手の意図に依存するというのはその一例である。そこで、(6)(7)は、ゴン太の一つの行為に対して二つの記述が与えられているとすることができる。(8)(9)(10)は、その行為の結果の記述である。当然この過程では他にも「米を入れた水が沸騰する」などの記述を述べるのが可能である。それゆえに、ここでは五つの kriyā があるのではなく、一つの（複合）行為としての kriyā と、その kriyā の諸結果としての諸 kriyā が様々な記述されているとすべきである。この後者に対する記述が、従属する kriyā、すなわち guṇakriyā の記述ということになるのである。動詞語根の意味の議論として、文法学派ではそれは kriyā であり、ミーマーンサー学派

バッタ派では、kriyāの結果であると説かれるが、この見解の相違は、この〈調理する〉(pac)の議論でわかるように、動詞語根が実際の用法で、行為を意味する場合も、行為の結果を意味する場合もあるという事実から出てきているのである³²。そして上述のように、ミーマーンサーではkriyāの結果(phala)という言い方をするが、実際は、その結果自体がkriyāとして記述されうるものなのである。

先の議論で述べたように、この場合はゴン太が主たるkarṭṛである。つまりゴン太のみが「行為者」という名にふさわしいものである。ゴン太により、薪や鍋などの諸kāraにkarṭṛ性が吹き込まれるのである。そのようにゴン太によって吹き込まれたkarṭṛ性を有するものは、吹き込まれた時点より後においては、まさにkarṭṛとして、すなわち〈自らに依存するもの〉として役割機能をもたらす。つまり、いったん火をつけられた薪はその後ゴン太の手を離れて燃え続けるし、米は一見、ゴン太の手を離れて柔らかくなる。しかしながら、前述の④でわかるように、その場合もいつでもゴン太は薪の火を消すことができるという意味で、その薪のkriyāは彼の指揮下にあるということができる。つまり、彼はこの行為を遂行中のkāraの作用の過程に関わっている³³。

このように記述の仕方の違いにより、何がkarṭṛとみなされるかも異なってくる。それにより同一の出来事が、複数のkriyāとして記述される。文法学派などによっては、この場合、主たるkriyāに対しての従属するkriyā, guṇakriyāという言い方がされる。以上のような行為に限らないkriyāの捉え方には、Bhartṛhariの時代にはすでに様々な見解があったが、ここではそれらに深く入り込む余裕はない³⁴。

7. 結語

文法学派におけるkriyāの議論は、動詞の意味という観点からなされているものである。その点から、「行為」という訳語は、厳密に言うとはふさわしくない場合が良くある。しかしながら、kriyāというものを、やはり行為として捉える見方が基本にある。そこで彼らは特に行為に関わるkriyāに関して、〈主〉たるkarṭṛという概念を導入して考察した。その場合、kriyāのkarṭṛの説明に心的状態が入ってくる。

しかしながら、それで動詞の意味全般は説明できない。つまりkriyāというのが、まず動詞の意味するものとするならば、心的状態の関わらないkriyāというものが現にあるので、心的状態を組み入れた説明には当然反論が出てくることになる。しかしそのような議論が出てくること自体、kriyāを行為と考える捉え方が強いことを示している。

そして、上で見てきたように、彼らのkriyā論は、世界でのある種の出来事をどのように記述するか、という記述の仕方の理論である。そこで、行為論として、この〈主〉たるkarṭṛを説くものとしてのkriyā論を見た場合、次のような問題点がある。それは、上で見たように、〈主〉たるkarṭṛが行為を開始したら、それによって諸kāraにはkarṭṛ性もたらされ、話し手の意図次第で、それぞれのkāraにkriyāがあるというように記述されるという点である。この見方は、〈主〉たるkarṭṛによるkriyāが行為に相当するものであり、諸kāraのそれぞれのkriyāは、その〈主〉たるkarṭṛから独立されたものとして記述され、行為の結果としての出来事ということになる。このような見解では、行為者は、

その行為を引き起こすというレベルのみにコミットしているということになる。しかしながら、上で見たように、〈主〉たる karṭṛ, すなわち行為者は、それぞれの kāraka の動きをいつでもやめさせることができるという意味では、それぞれの役割機能にまでコミットしていることになる。しかし実際は、いつでも主たる karṭṛ が諸 kāraka の役割機能に対してそのような立場にあるとは限らない。ボールを投げるという行為をなすと、ボールが飛んで行くことまでを途中でやめさせることはできないのが普通である。いったん主たる karṭṛ が行為を開始したら、Davidson の言う通り、後は自然の流れなのである³⁵。

-
- ¹ 次に挙げる例の他には、たとえば、Moya (1990, 10-11) で挙げられている複数の例を見よ。文法上の形式を通じて行為者は何かということ限定することはできない。Davidson (1971, 44) 参照。
- ² kāraka とは、ものについて言われているというのが本来の考え方のように思える。ただし、言うまでもなく、それは純粹なものについて言われるのではなく、kriyā に何らかの仕方に関わっているという観点からのものである (Cardona 1974, 231, 277-279)。それゆえに、同一のものが、文脈次第で様々な kāraka となり得る。Bhartṛhari は、その「仕方」という点を強調して、kāraka を sādhana という語で説明し、〈能力〉 (śakti) とみなしている。SS 1 参照。
- ³ より正確に言うと、動詞語根 pac が調理するという kriyā を意味する。パーニニ文法によれば、たとえば、devadatta odanaṃ pacati (デーヴァダッタが粥を調理する) という場合の pacati においては、人称語尾の -ti は karṭṛ を意味する。P. 3. 4. 69 laḥ karmaṇi ca bhāve cākarmakebhyah を参照。
- ⁴ P. 1. 4. 49 kartur īpsitatamaṃ karma. ただし、格語尾変化との関係で、他にも karman と認められるものがある。この、1. 4. 49における「行為者の最も望んだもの (īpsitatama)」という表現を見ても、karṭṛ というものを第一に欲求という心的状態を持ったものと考えていることがわかる。
- ⁵ P. 1. 4. 45 ādhāro'dhikaraṇam.
- ⁶ P. 1. 4. 32 karmaṇā yam abhiprāye sa sampradhānam. 他にも sampradhāna と認められるものがある。
- ⁷ P. 1. 4. 24 dhruvam apāye'pādānam. 他にも apādāna と認められるものがある。
- ⁸ P. 1. 4. 42 sādhatamaṃ karaṇam.
- ⁹ Moya (1990, 12) 参照。
- ¹⁰ Moya (1990, 10-13), Frankfurt (1978, 43) 参照。
- ¹¹ Davidson (1963).
- ¹² ただし、行為はすべて意図的 (intentional) であるとは限らない。ウェイトレスがメニューをわざと落としたり、その落ちたメニューがはねて、となりのテーブルの客の足にぶつかったかもしれない。この場合、ウェイトレスは意図的にメニューを落としたが、メニューをとりの客の足にぶつけたのは意図的ではない。両者とも彼女の行為とすることができる。Davidson (1971, 45).
- ¹³ 'kārakāṇaṃ pravṛttiviśeṣaḥ kriyā' (MBh I, 258, 11, MBh II, 410, 13-14).
- ¹⁴ この例では、落ちた段階で自然と karaṇa の動きはやむと言った方が良いかも知れない。この考え方が当てはまるのは、たとえばお湯を火で沸かすというような場合である。その場合、沸いた後も火の動きは自然には止まらないので、karṭṛ が火を消す、すなわち火の燃えるという役割を終えさせるということができる。

- ¹⁵ Ogawa (2000). この見解は、SSにおいて、kārakaに対する捉え方の様々な説が列挙されている中で出てくる一つである (SS 32-33)。行為論で〈引き起こす〉という点を論じる場合、AがBを引き起こすとすると、次にはAを引き起こすのは何かということが問題になる。そしてさらにそれを引き起こすのは何かというように続き、どこで止まるのかを考察せざるを得なくなる。そのようにして、この pravṛtti の議論は、いわゆる「基礎的行為」(basic action)、あるいは「原初的行為」(primitive action) との関係で論じることが可能であろう。基礎的行為や原初的行為については Danto (1965), Davidson (1971) 参照。
- ¹⁶ Ogawa (2000, 365).
- ¹⁷ Ogawa (2000, 345, 365).
- ¹⁸ Ogawa (2000, 356).
- ¹⁹ Ogawa (2000, 366).
- ²⁰ Ogawa (2000, 356, n.16).
- ²¹ 1で述べた MBh の「諸々の kāraka の特定の活動が kriyā である」という記述に続く箇所では、kāraka が、まず第一義的に心的状態を持ったものとして考えられていることがわかる。「諸々の kāraka は、素の粥に対してと、肉入りの粥に対してと異なって行動する」(MBh I, 258, 11-12)。つまり、人は肉入りの粥を見ると、それに対して強い欲求を感じて、迅速にその粥に向かっていく。しかるに、素の粥を見ても、反応は鈍い。Mbh のこの箇所では、kāraka というのは、karṭṛ であると考えられる。そうすると、「諸 kāraka の特定の活動が kriyā である」というのは、karṭṛ の活動が kriyā であると解釈できることになる。さらに、この場合の karṭṛ というのは、「強い欲求」「鈍い反応」ということから、心的状態を備えたものであるということが出来る。
- ²² 文法学派では、たとえば Kaṇḍabhaṭṭa は、〈調理する〉(pac) の説明に prayatna, yatna (努力) というものを組み込んでいる。VBh on 2 (この番号は Bhaṭṭoji Dikṣita の詩節の番号) など。Cardona (1974, 237) 参照。また、ニャーヤ学派でも、人称語尾の説明に kriti=yatna (努力) というものを持ち込む。たとえば、Cardona (1974, 252-254), Mazumdar (1977, 75-81), 小川 (1990, 60-62) 参照。
- ²³ しかるに、「風で紙が落ちる」「芽が生じる」のような場合は、行為の結果ではない単なる出来事の記述である。
- ²⁴ この ṇvul については、P.3.3.10, さらに女性形になる場合には P.3.3.108-110 を参照。
- ²⁵ SS 18 参照。
- ²⁶ ここでの普遍とは、それぞれの kāraka の役割機能が個々の pac (調理する) であり、それらに共通の pac という普遍があるということである。結局その普遍としての pac が、次には「彼が調理する」という個としての出来事となっている。
- ²⁷ SS 22-23において王と戦士の次のような比喩が述べられている。王の命令により、戦士が戦うとする。命令以前には、戦士には潜在的に戦いという kriyā に参与することができるという〈戦士性〉がある。命令以後には、命令に依拠することなく、戦いという kriyā に対して〈自らに依存すること〉を得ることにより〈戦士性〉を有する。しかるに、命令の時には、勝利や敗北を結果として持つ成立されるべき戦いという kriyā に対して、命令者である王が karṭṛ である。その場合には戦士たちには、命令に依存することにより〈自らに依存すること〉がないがゆえに。
- ²⁸ 岩崎 (1993, 50) は、〈主〉たる kriyā を「軟化」(viklitti) と断定して議論を進めている。その根拠は、「ここで、pac の主要な意味 (pradhānārtha) は何か? それは、諸々の米の軟化である」という MBh on P.3.1.26 (MBh II, 32, 24-25) の記述である。しかし、文脈を考慮してこの問題は考えるべきである。ここで問題となっていく文脈において、〈主〉たる kriyā を直接〈主〉たる karṭṛ に関係づけるべきである。実際、Cardona (1974, 237, 264) は、〈主〉たる

kriyā をここで述べているように複合行為と解釈している。Deshpande (1990, 45) はそれを、そこに関わっている全ての kāraka の諸役割機能の複合したものと解釈している。(KS 4 では「順序を有して生じる〔諸々の役割機能〕の集合が、従属した諸部分との区別がないと心によって想定されて、kriyā と表示される」と述べられている。) また、上で「文脈を考慮」と述べたが、当時から〈主〉たる kriyā に関しては様々な解釈が存在していたようである。VP3.8.1 に対する Helārāja の注釈を見ると、上の岩崎が引用している MBh の箇所を挙げて、その解釈を批判する説が挙げられている。つまり「軟化」というのは、〈対象〉(karman) の役割機能であって、「kriyā の結果 (phala)」としてあるものである。それゆえに、pac の〈主〉たる意味は、「軟化」ではなく「軟化させること」(vikledana) である、という見解である。Helārāja はこの見解を、語に述べられたものとしての kriyā の〈主〉たる意味であると説明している。つまり、このことは言い換えると、(単なる kriyā ではなく) 行為として記述される場合は、pac の〈主〉たる意味は「軟化させること」であるということになる。まさにこれは〈主〉たる kartṛ の kriyā である。上の MBh の「軟化」を〈主〉たる意味とする説は、Helārāja によれば、語によるものではなく(すなわち何らかの記述の下で考えられているのではなく) 存在の側で起こっていることなのである。この Helārāja の解釈に従っても、本論文で問題にしているのは、あくまでも〈主〉たる kartṛ と結びつけられている〈主〉たる kriyā であるので、〈主〉たる kriyā を「軟化」とするのは適切ではない。

²⁹ 1 で引用した KS 1 を見よ。

³⁰ Davidson (1978, 58-59), Anscumb (1963, 45-46) 参照。

³¹ たとえば、MBh I, 11, 1 において、文法学にとっては語が述べるものが正しい認識を与える手段 (pramāṇa) であると述べられているが、そのような表現は、文法学の文献においてしばしば登場する。

³² VBh on 2 では、動詞語根は行為の結果 (phala) と役割機能 (vyāpāra) の両者を意味し、結果に対して役割機能が〈主〉であるとする Bhattoji Dikṣita の詩節を受けて、役割機能を kriyā と同一視している。小川 (1990, 17-19) 参照。またミーマーンサー学派の、動詞語根の意味を〈結果〉であるとする説については、Mazumdar (1977, 37-61), 小川 (1990, 67-68) 参照。

³³ Frankfurt (1978, 43, 45) 参照。

³⁴ たとえば KS13-24 参照。

³⁵ Davidson (1971, 59)。

テキスト・略号表

KS: Kriyāsamuddeśa of *Vākyapadīya*

MBh: *Mahābhāṣya* of Patañjali

The *Vyākaraṇa-Mahābhāṣya* of Patañjali, ed. by F. Kielhorn, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 3vols., 1962-1972. (引用箇所の表記については、MBh の後のローマ数字が Kielhorn 版の巻数、後のアラビア数字が順にページ数、行数。)

P: Pāṇini's *Aṣṭādhyāyī*.

SS: Sādhanasamuddeśa of *Vākyapadīya*

VBh: *Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra* of Kaunḍabhaṭṭa

Vaiyākaraṇabhūṇansāra of Śrī Kaunḍabhaṭṭa, ed. by Pt. Śrī Bālakṛṣṇa Pañcholi, Varanasi: Chokhamba Sanskrit Series Office, 1969.

VP: *Vākyapadīya* of Bhartrhari

Vākyapadīya, Part III, vol.2 ed. by Raghunātha Śarma, Vanarasi: Sampuranand Sanskrit Vishvavidyalaya, 1979

参考文献

- Anscombe, G.E.M. (1963) *Intention*, Second Edition, Oxford: Basil Blackwell.
- Cardona, George (1974) 'Pāṇini's Karakas : Agency, Animation and Identity', *Journal of Indian Philosophy*, 2, 231-306.
- Danto, A.C. (1965) 'Basic Actions', *American Philosophical Quarterly*, 2, 141-148.
- Davidson, Donald (1963) 'Actions, Reasons, and Causes', reprinted in Davidson (1980), 3-19.
- Davidson, Donald (1971) 'Agency', reprinted in Davidson (1980), 43-61.
- Davidson, Donald (1980) *Essays on Actions and Events*, Oxford: Clarendon Press.
- Deshpande, Mahadev M. (1990) 'Semantics of Kārakas in Pāṇini: An Exploration of Philosophical and Linguistic Issues', B.K. Matilal and Purusottama Bilimoria (ed.), *Sanskrit and Related Studies*, Delhi: Sri Satguru Publications, 1990, 33-57.
- Frankfurt, Harry G. (1978) 'The Problem of Action', reprinted in Mele (1997), 42-52.
- 岩崎良行 (1993) 「パーニニ文法学派における〈態〉記述の一考察—自動・再帰用法 (karmakar-tari) について—」『印度哲学仏教学』(北海道印度哲学仏教学会) 8, 40-62。
- Mazumdar, Pradip Kumar (1977) *The Philosophy of Language*, Calcutta: Sanskrit Pustak Bhandar.
- Mele, Alfred R. (ed.) (1997) *The Philosophy of Action*, Oxford: Oxford University Press.
- Moya, Carlos J. (1990) *The Philosophy of Action: An Introduction*, Cambridge: Polity Press.
- 小川英世 (1990) 「行為と言語 サンスクリット意味論研究: 動詞語根の意味」『広島大学文学部紀要』49, 特輯号3。
- Ogawa, Hideyo (2000) 'Bhartṛhari on Pravṛtti as the First Kāraka', *On the Understanding of Other Cultures*, ed. by Piotr Balcerowicz and Marec Mejor, Warsaw: Oriental Institute, Warsaw University, 343-368.